

い。直五郎はこの山中で今は幽冥境を異にした友を守って、お通夜をする決心をした。

今頃、天狗さまの实在を信ずる人は極めて少いと思うが、先日ある天狗研究の博士は、テレビで天狗は実在します、と断言するのをきいた筆者は、一説として面白く拝聴したというに過ぎないけれども、その当時の人びとは西山に天狗が住んでいたと信じていたようである。一晚のうちに、大きな石を動かしたり運んだりする天狗平という場所なども現存すると信じていた。直五郎とて、天狗实在説の否定論者ではなかった。

ところで、夕闇のせまったころ、目にはつきりはわからないが、静寂を破って何者かが直五郎の身边を包囲したような感じである。死者と深夜一しよにいるのさえ仲々の恐怖であるのに、その上にも恐しい天狗の襲来である。それも単数ではなさそうである。天狗連の集団に襲われたらどうしよう。髪の毛は一本一本逆立ち、日ごろ剛気の直五郎も恐怖のどん底におのかざるを得なかった。夜明け前にこれらの怪物どもは消え去り、これが正体を確めることはできなかつた。果して天狗どもであったか否かはしばらくおき、老猿どもの襲来であったことには間違いないところである。

翌朝になって、直五郎はひとりの獵師を山麓において見つけた。おうい、おういと必死になって、直五郎は未知の男に呼びかけた。しめた。こちらをむいたではないか。直五郎は昨夜からの事情を話して、協力を求めた。獵師は村にもどって、駐在所から電話をかけてくれることを約束した。この獵師は、直五郎との約束をりっぱに果たし、村方に伝えてくれた。その日の夕方、村方四、五十名の人びとが、神官や村役人と共に板戸をもって迎えにきてくれた。治郎兵衛は、毛布につつまれこの板戸に載せられ、無言の帰村をした。悲しきなかに村葬にも等しい盛大な葬式が営まれたという。